2022年12月13日

意見陳述書

原告　塩川まゆみ（愛媛県内子町）

内子町在住の塩川まゆみと申します。原告の一人として、意見を述べる場を与えていただいたことに感謝します。

私は1969年生まれで、高校を卒業するまで福岡県で過ごしました。佐賀県にある玄海原発から半径60km圏内に入る地域ですが、原発については特に意識することもなく育ちました。1979年のスリーマイル島の原発事故当時には10歳でほとんど記憶になく、中学生になってからテレビで「チャイナ・シンドローム」という映画を観て、「原発事故ってこわいなあ」とぼんやり思った程度です。

当時、世界はアメリカとソビエトの冷戦時代であり、東西の緊張と核戦争の可能性、原爆水爆の恐ろしさを常にどこかで意識するような空気があったと思います。映画や小説、音楽などでも冷戦や核戦争を題材にしたものが数多くありました。

私の子ども時代、福岡県下の小中学校では「平和教育」があり、夏休み期間中の8月6日と9日の原爆記念日は必ず登校日になっていて、その日は原爆と戦争の悲惨さについて学ぶ機会でした。子どもながらに「戦争は絶対いけない」「核兵器は絶対使ってはいけない」と強く思ったものです。ただ、これだけ核戦争に恐怖を感じ、「核はいけない」と確信していたというのに、同じ核を扱う原発に対しては、大した根拠もなく「大丈夫だろう、事故など起きないだろう」と思いこんでいたのが不思議です。

それが同じ核である、と気づいたのは1986年4月に起きたチェルノブイリ原発事故のときです。これもまた今思えば報道そのものにも相当なバイアスがかかっていたと思います。それでも、「敵」であるソビエトで起きた事故なので、鬼の首でも取ったように批判的な論調で大きく報道されていました。汚染が北半球全体に拡散したこと、たくさんの食べ物が汚染されてしまったこと、これだけ距離が離れた日本でも「雨に濡れない方がよい」と言われたこと。そして、放射能の晩発性の影響と思われる動植物の変異、ベラルーシやウクライナの子どもたちの心身の不調など、その影響の大きさには大変な衝撃を受けました。その後、東京の大学に進学してからは、原発にはもちろん反対の立場でしたが、関連の本を読んだり映画を観たりはするものの、たまに支援団体に募金する程度で、特に反対運動に積極的に関わることもありませんでした。

チェルノブイリを知っても、どこかで「あれは旧ソビエトだったからあんなに大変な事故になった」「日本では事故は起きない」または「起きてももっとちゃんと対応できるだろう」と思い込んでいたのです。今思えば、本当にのんきなことでした。

2011年3月11日の東日本大震災当時、私は東京都狛江市に住んでいました。東京に住んだことのある人はご存じだと思いますが、もとより都内は地震がとても多く、震度２～３もしょっちゅうです。ちょっとした地震だったら、人々は足さえ止めません。でもあの日の地震は明らかに違いました。おさまるどころか、揺れがどんどん大きくなり、また時間もとても長く感じられました。小学生の子どもたちは学校からまだ帰宅しておらず、とりあえず家の中で一番家具が少なく安全だった和室の真ん中で、当時1歳だった3番目の子どもを抱きしめて揺れがおさまるのをひたすら待ちました。東京も震度5弱から5強の揺れを観測し、私の住んでいた賃貸マンションの4階でも、棚から物が落ちたり食器が割れたりといった被害がありました。

震源が近いのではないか、都心はもっと被害が出ているのではと思ったのですが、その直後のニュースで震源が東北であることを知り、こんなに離れた東京でこれなら、現地はいったいどのようなことになっているのかと、ほとんど呆然としたことを覚えています。

地震の情報を得るためにとりあえずネットをチェックしたら、福島第一、第二原発、女川原発の状況がどんどん飛び込んできました。当時の神奈川県川崎市浮島にあった東芝の関連会社のリアルタイムモニタリングポストの放射線量を表すグラフが、グラフの外枠上辺をはみ出してほとんど垂直の線になったことも忘れられません。

これ以降のことは語り始めると大変に長くなり、また11年が経過してもいまだにある種のフラッシュバックを私にもたらすものであるので省略させていただきますが、このように250km離れた東京でさえ一時的に放射線量が大きく上昇したこと、私の住んでいた東京都西部の学校周辺、多摩川の河川敷の土さえも測定したら汚染度が予想以上に高かったこと、報道されることはありませんでしたが、3月11日から12、13日頃にかけて相当な人数が首都圏を脱出したこと、その一方でメディアはひたすら安全をアナウンスし続けたこと・・・他にも、物流や電気水道が止まった大都市のあまりの脆弱さを体験して、今後の子育てのことも考え、2011年6月に縁もゆかりもなかった愛媛県内子町に移住しました。すでに数年前に福岡の実家を整理して、東京に両親を呼び寄せていたのです。もし福岡に実家があれば、私も迷わず即、福岡へ移動したでしょう。

幸いなことに、住まいは持ち家ではなく賃貸で、私の仕事はフリーランスの在宅翻訳、ネットがつながる環境があればどこでも仕事ができます。それでも20年あまりの東京での生活で築いた人間関係や居場所、環境、そのすべてから離れることになりましたが、子どもたちの健康な生活を守るために、迷いはありませんでした。

内子町を選んだのは、町内で自給的農業を営む人のブログを以前から読んでいたことがきっかけでした。土も水も森も豊かな自然環境、食べ物を地域で生産していること、そして人口密度が低いことなどが移住先選定の条件でしたが、内子町はまさにそういう町だったからです。

もちろん愛媛県には伊方原発があります。内子町は一部がUPZ圏に入り、町内の人口の8割近くが40～50km圏内に居住しています。地元の友人知人からも「なんで3.11と原発事故が理由で、東京からわざわざ伊方の近くに引っ越してきたのか」と聞かれることがよくありました。そのたびに私はこう答えるのです。「あれだけの事故を、あれだけの地域住民の悲痛と苦しみを日本中が目撃したというのに、まさかこの先原発を運転し続けるなんてありえない、原発が再稼働されるわけがない、これで日本は原発ゼロに向けて方向転換することになるだろうと思ったから」だと。

福島から避難した人たち、自分のふるさとや心のよりどころを失ってしまった人たち、そのうちのお一人からでも、その体験や思いを聞けば、同じことが自分の住む土地で起こったらという想像力が1ミリでも働くならば、再稼働しようという発想自体が出てくるわけがないと信じていたわけです。これについては、残念なことに、私の読みが甘かったと言わざるを得ません。

先祖代々何十年、何百年と作ってきた田畑や森、それが一度の原発事故で喪われる、ひとたび事故を起こせば半永久的に立ち入れない土地を国土の中につくる。人々の生業もコミュニティもすべて破壊します。震災後、「絆」という言葉のもと、復興が喧伝された時期がありました。すべてのつながりを失った人たちがいるのに、なんという皮肉だろうと思います。

望まぬ転居や転職、一家離散を余儀なくされる、これは最大級の人権侵害です。原発が否定するものは、私たちの基本的人権です。

内子町に住んで11年が経ちました。景色も暮らしも、日々新たな発見があり、本当に大好きな町です。内子町をさらによい地域にしたい、人々が安心安全に、幸せに暮らせるまちにしたいと、去年には勢い余って町議会議員に立候補してしまいました。保守的と言われる南予で、こんな移住者の私をあたたかく受け入れてくれただけではなく、貴重な一票を投じ議会に送り出してくれた内子は、本当に有難く、面白い町だと思います。内子町に限らず、愛媛県内のいろんなところでよいご縁に恵まれ、大好きな人たちもたくさんいます。

こんな素敵な地域が、原発事故により半永久的に立ち入り禁止になり、住む人がバラバラに離散するようなことは、あってはならない。天災は止められなくても、人災は人の手で止められます。原発事故は、まぎれもなく人災なのです。人災なのですが、あまりにもその被害の規模が時間的にも空間的にも大きすぎて、誰も責任を取ることはできません。総理大臣も県知事も、市町の首長も、再稼働に賛成した議会も議員も、だれひとり、汚染された土地や失われた暮らしを元に戻すことはできないのです。責任をとって辞職しようが賠償金を払おうが、そんなものが一体何になるでしょう。

住む人たちが自分らしく、安心安全に、生き生きと暮らし、そのように幸せに暮らす人たちが集まってはじめて幸せな地域社会が成り立ち、ひいては幸せな国になるわけです。この順序に逆向きはありません。国は、人がいなければ成り立ちません。どんなにGDPや統計数字を改ざんしようとも、はりぼてを整備して復興や繁栄を装おうとも、いきいきと幸せに暮らす人のいない土地に、「豊かな」自治体や国など成立しようがないのです。

気候変動対策を理由として、岸田内閣は原発推進に転じ、再稼働の推進や増設、老朽化原発の運転延長などを推し進めようとしています。CO2を減らすと言いながら、原料となるウランの採掘の時点から環境破壊や被ばく労働を引き起こし、運転中にはその場で働く人々に被ばくを強い、環境中に人工放射性物質を放出し、最終的には処理する方法さえ見つかっていない放射性廃棄物を続々と生み出し続けるものです。もう、最高に、前時代的です。21世紀の世界が目指す価値、持続可能性、多様性や包含性、平等などにはまったく一致しない方向です。

岸田首相は、防衛費増額に向けて増税も視野に入れた財源捻出の調整を始めたとの報道がありました。反撃能力と称して軍備を拡張することが抑止力になると考えているのでしょうが、本当に愚かな話です。防衛費を増やしてどれだけ武器を買おうとも、基地を作ろうとも、ご丁寧にも海岸線に並べた原発、あれらを普通攻撃されれば日本の国土も国民も財産も、もう不可逆的に損なわれます。核兵器や大層なミサイルさえいりません。稼働中の原発を国土の海岸線に並べて置く、これがどれだけ防衛上の脅威か理解できないはずがないと、素人考えながら思います。

真の意味の「国防」そして「防災」、国民の命と生活を守ることを考えるならば、まず全国の原発を、今この瞬間にも運転停止し、廃炉プロセスに入るしかないでしょう。廃炉の完了はそれでも何十年も先のことになります。使用済み核燃料保管施設の維持管理には不安が残ります。それでも原発運転中に南海トラフ地震に見舞われる、またはどこかの誰かに攻撃されるよりは、多少はマシになることでしょう。

今回の意見陳述にあたり、「伊方原発をとめる会」のホームページ上で公開されている2012年5月29日から2022年9月29日までの56件の意見陳述書をすべて読みました。職業も来歴も年齢も異なるさまざまな立場の人たちが、伊方原発を止めたいというたったひとつの共通の想いの下に、多様な視点から自分自身の言葉で思いを語るその文章の、量にも内容にも圧倒されました。もう、私が言うまでもない、述べたいことはあらゆる角度からすでに述べられていて、ここに新たにつけくわえることなどないようにさえ思えました。なのに、現実には、伊方原発はもちろんのこと、全国で原発は停まっていません。廃炉に向かっていません。なぜでしょう？本当に、皮肉などではなく、心底理解できません。

私は今ここに、原発事故によってその人生を大きく変えられてしまった人たちの抱える痛みや苦しみに思いを馳せながら立っています。思いを馳せるとは言っても、当事者ではない私には計り知れない、寄り添うということさえ烏滸がましいと思います。想像し、涙を流し、祈ることしかできません。魂の苦悩を抱え今も生きる方々、亡くなってしまった方々、その方々への祈りと共に、ここに立っています。

それから、これまでの６次にわたる訴訟で意見陳述してきた56人を含む、のべ1500人の原告のみなさん、何十年も前から続いてきた全国各地の運転差止訴訟や市民運動にかかわってきたすべての人たち、かつての私のように、具体的な行動は起こしていなくても反対の立場ある人たち、この愛媛県内で、様々な事情から公には発言できないけれど、内心では原発に不安を感じ、やめてほしいと思っている人たち、さらには世界中で脈々と続いてきた、何十万何百万、もしかしたら何千万何億もの、原発を、核をやめて命や環境、子々孫々を守りたいという人たちの想い、その歴史と、膨大なパワーと共に、この場に立っています。ひとりではない、と力強く感じています。

なんのために三権分立、国権が3つに分けられているのでしょう。権力の一極集中と濫用を防ぐためです。釈迦に説法の極みですが、ここは大事なところなので100万回でも強調させてください。権力の一極集中と濫用が人類にもたらした悲惨の歴史は、ここにいる裁判官の皆様は、誰よりも理解されていることでしょう。

これまで述べてきたように、三権のうちの２つ、立法府と行政府は、大変情けなく、腹立たしくも残念なことに、本気で国民の基本的人権を、命を守る気がないのです。だとしたら、せめて裁判所にはこの2権と対峙してバランスをとってもらわなければ、三権分立の意味がありません。

ここにいる皆さんにお尋ねしたいです。立法府と行政府が現在進行形で行っている、国家権力の濫用による基本的人権の侵害に、お墨付きを与えるようなことをするのが裁判所の役割でしょうか？

どうか、正しく、その務めを果たしてください。

みなさまの職業人としての矜持、そしてヒューマニティと良心を信じています。国民が、国は私たちの命を守ってくれるのだと安心できるような、「画期的な判決」と報道されるような判断を見る日が確実に来ると信じて、私の意見陳述を終わります。